

今日の説教のポイント <ルカによる福音書 23 章 13~25 節>

キリスト教で一番大切な十字架の出来事。そこで注目すべきは、殺す人間と殺されるイエス・キリスト。今日はその前者に注目。

①イエス・キリストを度々救おうとしたピラト。彼の罪は何か？

福音書記者ルカは、ピラトが三度も「この男（イエス様）には罪が見出せない」と言ったことを強調しています（23:4, 15, 22）。ルカはピラトに罪はないと言いたかったのでしょうか？ イエス・キリストに罪はないことを知っていながら「この人に罪はない」と宣言し、ユダヤ人にイエス様を引き渡したことは、彼の責任を軽くするのではなくてむしろ重くするのです！

今日の箇所を読むと、まず、イエス殺しの責任はユダヤ人民衆を扇動した祭司長や議員たちにあるように思えます。しかしよく考えると、扇動された民衆が声を張り上げてイエスを死に追いやった責任も重いです。さらに、法的には総督ピラトの死刑許可が必要であり、彼はそれを許可したのです。一体、「罪無し」と言える人はいるのでしょうか？ いません。イエス様を置いて逃げ出した弟子たちも後で自らを責めています、仕方なかったと言っています。誰もがイエス殺害の一翼を担ったのです！ 大事なことは、彼らのどの姿にも私たちは自分の姿を重ねて見るし、また見なければならぬということです。それでいいのです、彼らは私たちの「代—表」なのです！ 使徒信条が、「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け」と、わざわざ 1) 異邦人であり、2) この世の法の番人である、ピラトを取り上げていることの意味がここににあります。1) ユダヤ人がイエスを殺したと考えることの過ち、2) この世の法の限界とそれを運用する人間の弱さ、この二つの問題を考えるように使徒信条は告げているのです。

②しかし、この話は人間の暗さを告げて終わる話ではなく、神の明るさを告げる話の始まりである！

これだけ聞いて終わると救いようない暗い話です。しかし、「殺した人間」から「殺されたイエス・キリスト」に見るべき方向を変える時に新しい展開が始まります。神様が用意して下さった破格の恵みを知らされる話、「私たちが—神様の明るさの中を—歩み行ける」話の始まりです。来週、さらにその話に耳を傾けて行きましょう！